命のうた

竹内早希子作　石井勉絵　童心社

日本では、第二次世界大戦で多くの子どもたちが戦争孤児となりました。なかでも、家もなく頼れる人もいない子どもは、路上や駅で暮らし「浮浪児」と呼ばれました。

清一郎もその一人です。一九四五年の神戸大空襲では、たった十歳で家族を失います。残飯を拾い、盗みもし、まわりから野良犬のようにあつかわれました。帰る場所もなく、支えてくれる人もいない孤独感。それでも、なんとか生きのびたのです。

路上で生きていた子どもたちの、声なき声を伝えます。